月刊

こころのとも

第十一巻
六月号

しつけの為に叩くのか

愛情と
しつけは両立
せぬという
評論家がいて
驚きだ
愛情深けりゃ
ぶたずとも
しつけはいくらも
できると知れよ

不平等の是認

金持ちに
ますます金が
貯まる世の
不平等をば
何とすべきや

人生を考え直して みたい人は（七七）

―『正法眼蔵』解説（二一）―

有時（うじ）の巻を続けます。

三頭八臂はきのふの時なり、丈六八尺はけふの時なり。しかあれども、その昨今の道理、ただこれ山のなかに直入（じきにゅう）して、千峰万峰をみわたす時節なり、すぎぬるにあらず。三頭八臂も、すなわちわが有時にて一経（きょう）す。彼方（ひほう）にあるににたれども、而今なり。丈六八尺も、すなはちわが有時にて一経す、彼処（ひしょ）にあるににたれども而今なり。

例によって、参考までに現代語訳として、玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）のものを引用させて頂きます。

三頭八臂は昨日の時であった。丈六八尺は、今日の時である。しかし、昨日・今日の道理というのは、昨日が過ぎて今日が来るのではない。たとえば、山のなかに入って、千峰万峰を一目に見わたしているような時節である。けっして過ぎ去ったわけではない。三頭八臂もあり、丈六八尺もある。三頭八臂も、すなわちわが有時として経過した。かなたにあるようだければも、永遠の今である。丈六八尺も、すなわちわが有時として同じように経過している。あそこにあるようだけれども、これも永遠の今である。

前回までの部分が十分お分かりの方は、この部分はそれほど難しくないのではないでしょうか。復習を兼ねて、少しだけ解説しておきます。

復習ですが、私たちが時間と言えば、時計で測れる、いわゆる物理的な時間のことと決まっています。いま何時とか、どれほど時間が経過したかとか、今日は何年何月何日かとか、自分が生まれて何年たつか、つまり年齢はいくつか、などなどです。

こうした時間は、これまで学校教育や日常生活のなかで、問題になり、学んできた実用的な時間です。この時間は誰でもが知っている時間です。

でも、時間は、これだけではありません。たとえば、永遠の時間というときは、何をいっているのでしょうか。私たちに、物理的な時間しか問題にならないのだとしたら、永遠の時間なぞ、測りようがありませんので、日常ではまったく問題にならないと言えます。

また、太閤秀吉が「なにわのことも夢のまた夢」と嘆きましたように、なぜか同じ時間なのに、短かったり長かったりします。人を待つ時間は長いのに、自分が何かに熱中している時間は短く感じます。でも、後では、前者は空しい時間で、後者は充実した時間となります。

また、過去とは何なのかとか、未来とは、現在とは、などと、時間が、そもそも、私たち人間にとって何なのかと考えだしますと、物理的時間では説明ができなくなってしまうのです。

何度も書いてきましたが、私たちにとって決定的に問題になる時間は、この世に生まれてきていつまでも生きていたいと思うのに、いつかは死んでいかなければならない、そういう時間を私たちは生きているのだ、ということなのです。いや、自分は老人になって、そんなに思わなくても木が枯れるように、自然に死んでいくから自分には当てはまらないと思う方があるかもしれません。でも、そんな人でも、自分の子どもが自分より先に、幼く死んでいくとき、どれほど悲しみや人生の無常を感じることでしょうか。

人間が真に幸せになるためには、充実した時間を生きなければなりません。それは、単なる物理的な時間の長さではないのです。分かって頂けないかもしれませんが、解脱に到った一日は、たった一日でも、凡庸に百年を生きた人の時間よりも、比較を絶して長い、永遠の一日なのです。

この世が、楽園になっていくためには、充実した時間を生きる人が多くならなくてはなりません。なぜなら、充実した時間を生きる人は、自分のためではなく他者のために生きることができるからです。

復習はこのぐらいにしておきます。ここで言っている時間が果して物理的時間なのか、宗教的・哲学的時間なのか、考えながら読んで頂ければ、さして難しくないと思います。

この世での出来事は、物理的に特定の時点や期間を指定することができます。つまり、それは、過ぎ去った時間として記憶に止めたり、記録したりすることができるのです。しかし、それは、過ぎ去ってしまった訳ではありません。解脱に到りますと、山の上から峰々を見渡すように、過去だけではなく、はるかな未来をも、とうてつした目で、（統合的に）見渡すことができるのです。

全てが、現在に統合されているのです。道元の言葉でいいますと、「有時の而今」として統合されているのです。一つ一つの出来事は、「有時にて一経す」と言えるのです。

自作詩短歌等選

教育基本法どう改正？

人格の
完成めざす
教育を
唱える人の
なかりけり
基本法では
定めてあるに

規範のない教師集団

君が代を
歌うことさえ
一致して
指導できない
教師たち
彼らに何を
期待すべきや

腐敗の原因

政治の世界も
経済の世界も
学問の世界も
教育の世界も
みんな腐敗してしまった
日本

その元凶は
思想の放棄と
宗教教育の禁止

山に登るか憲法は

憲法を
改正すべしと
する人が
増えてはいても
変えるべき
方向見える
人がない
山に登らぬ
こと願うのみ

贅沢三昧の食生活

贅沢を
戒めずして
自給率
高めることなど
できぬと知れ

パラサイト・シングル

若者の
親への寄生
急増す
それを名付けて
パラサイト・シングル

豊かに育って
貧しく老いる
若ものたちの
生き方を見る

少年の凶悪犯罪の責め

いま
大人よりも
子どもの方が
凶悪

ルソーや
ペスタロッチによると
十五歳までは
自然にしておいて
しつけをしてはならない
ということらしい

この影響で
民主主義では
子どもに自由が与えられ
親子が平等だと考えられ
て
しつけが為されないから
十五歳になるまでに
あるいは
それを少し越えた年齢で
凶悪な犯罪を
犯してしまう

ああ
なんと
恐ろしいことか

恐ろしい日本人

恐喝を
重ねた上に
口封じ
するため殺害
計画す
恐ろしきかな
日本人
恐ろしきかな
若者たちは

利益・選好が動機

保育所も
会社組織に
なる辞世
福祉が儲けの
ネタとなる世は

こころが伴わない

ついに出た
児童虐待
防止法
これで虐待
なくなると
期待するなよ
関係者
こころ説くこと
忘れているぞ

自作随筆選

平等感ある社会とは

五月二十九日付けの読売新聞「地球を読む」欄に、劇作家の山崎正和氏が、「平等感ある社会へ」と題して、最近の不平等感の高まりをいかに解決すればよいか、提案をしていました。

この人の評論は、自己への執着が強烈で、しかも、自分が執着していることにすら気付かないものですから、常に断定的に意見を述べています。多分、それは劇作家ということが影響しているのでしょう。今回の記事も、余りにも独断的で、多くの間違いを含んでいますので、別に恨みがあるわけでは、勿論、ありませんが、取り上げたくなってきました。

貧富の差の拡大を問題とする意識が、最近、芽生えてきて、「中央公論」と「文芸春秋」の五月号で、この問題が取り上げられていることと、その内容が紹介されていました。確かに、貧富の差は拡大しているようですし、余談ですが、私は、政府自身がそれを目指そうとしているように、思います。

この人は、こうした雑誌の記事を読むと「われわれがまだ不平等とは何か、どんな意味でそれが問題なのかという、確かな哲学を持ちあわせていないことに気づく」と、述べています。確かに、その通りだと思います。

私は、この人が、こう書くからには、この人は、その「確かな哲学」を示すものと期待して読んだのですが、期待に反して、哲学と呼べるほどのものは示しえていないばかりか、ますます混乱を招くような提案で、驚いてしまったのです。その内容の一部を、以下、紹介し、コメントさせて頂きます。

この人は、「機会の平等」と「結果の平等」について検討したのち、次のように述べています。

「こう考えると、人類にとって平等は実現できないばかりか、あるいは不必要な価値ではないかという疑いも芽生えてくる。・・・必要なのは、じつは格差のない社会ではなく、人が不平等を痛感しない社会であり、自己蔑視や他人への嫉妬（しっと）に苛（さいな）まれない社会ではないだろうか」と。

この言葉へのコメントは後回しにして、では、これがどのようにして実現できるのか、ということですが、その点については、次の二つの「予想」をあげています。

一つは、二十一世紀の富裕層は不安定で、いつ敗者にな

っていくかわからない。だから「彼らを見る世間の嫉妬の目をやわらげる」ことになるというものであり、もう一つは、「対人サービス業」が増えること。この職業は、人間関係を密接にし、そして、他人が、その職業に就いている人をすばらしいと「認知」すれば、それに励まされて働くようになる。そうなれば、他者から認められることが、生き甲斐となり、嫉妬や自己蔑視の原因が除かれるようになる、というものです。

皆さん、これを読まれてどんな印象を受けられますか。

私は、まったくの驚きです。こんなのがよく評論家の意見として通用するのだと、あきれるばかりです。でも、この人が書いていれば、すばらしいと思う人の方がずっと多いのが現実でしょう。多分、私の意見など、一笑に付されるのが落ちなのだと思います。老子も、そうでなくては、真理を述べていないといっていますので。

閑話休題（かんわきゅうだい）。

初めに帰って、この人の述べました「こう考えると、人類にとって平等は実現できないばかりか、あるいは不必要な価値ではないかという疑いも芽生えてくる」という言葉について検討してみたいと思います。

私は、常に言ってきていますが、人間に平等があるとすれば、それは、生まれて死ぬことだけなのです。生まれ（氏）も育ちも千差万別です。今日も、遊園地で自分はたばこを吸いながら、友達と話をしているのに、子どもが上手に自転車に乗れないでぐずぐず言っているのに腹を立てた母親が、平手で三歳ぐらいの子どもを打ちましたが、見ていて、こころが寒々としてきました。こうした親の下に生まれる子もいるのです。平等などどこにもありません。機会の平等も、まして結果の平等もあろうはずがないのです。

でも、だからといって、決して「不必要な価値」ではありません。私は、平等原理は、「自己」と「他己」のバランスをとる働き、文字通りで言えば「等しく平（はか）る」働きなのです。ということは、人々が自己への執着を捨てない限り、不平等を解消することは不可能なのです。

現在のように、自己をコントロールするのではなく、自己に執らわれ、自己を中心にして、他者（人や環境）をコントロールすることばかりを目指す社会（民主主義社会）では、どんな経済体制、どんな社会制度を取ろうとも、けっして解消することはないのです。

厳しいようですが、この人のいう、二つの「予想」なぞ、勝手な想像にすぎません。そこには、この人の嘆く哲学もなければ、人間性への洞察にも欠けているのです。

少年凶悪犯罪の日常化

大した動機もなく凶悪な事件を起こす少年たちの記事が、毎日のように新聞をにぎわしています。もはや、少々の事件では、誰も驚かなくなってきているのではないでしょうか。たとえば、「単なる親殺し」の事件など、どこかに吹っ飛んでいってしまいそうな情勢です。

そして、これに対する識者たちのコメントが、毎日のように新聞やテレビに登場しています。でも、的確にそのその原因について指摘しているものは、皆無のように思われるのです。なぜ、こうまで若者が、人の命を粗末にするのか理解を絶している、ということのようです。

先日も、例の「教育改革国民会議」が緊急アピールを出しましたが、人々の「こころにアピールする」と思えるものは何もありませんでした。

私は、これまで言い続けていますが、こうした事件は、若者の自己肥大・他己萎縮に原因があると思います。

でも、こういうだけでは、納得がいかないという方があるかもしれません。たとえば、バスジャックした少年は、精神病院に入っていて外泊許可が出た矢先のことで、心を病んでいたのではないか。凶悪なことをしながら、人質の幼い女の子には優しくしていたことが、報じられていて、矛盾した行動をとっており、病気としか考えられない、いや、病気としてさえ理解を越えている、と思われるのではないでしょうか。

でも、前述のように現代は、多くの人が自己を肥大させ、他己を萎縮させて来ているのですが、そのことは、他者としての人間が人間としての意味をもたなくなってきている、ということでもあるのです。

いま、ペットブームですが、そのペットを家族と同様に扱う方も多いようですが、それは、いわば人間と動物の境界がなくなりつつある、ということでもあります。浅瀬に打ち上げられたり、湾に迷い込んだりしたクジラを、何とか大海原に帰そうとする努力が大きく報道されます。昔なら日本では捕獲して食料にしたと思います。

人間と動物の同一化は、実は、片方では必然的に人間の命の軽視につながるのです。多くの人は、牛や豚などの動物の肉を日常的に食べています。ということは、それらの動物を毎日誰かが殺しているということです。人間の為に殺されるべく飼われているのが動物なのです。

自己肥大・他己萎縮した人たちは、人間をペットのように可愛がり、同時に、平然と肉食家畜のように殺すのです。酒鬼薔薇聖斗がしたようにです。

パラダイム相対主義

三月十日の産経新聞「正論」欄に京都大学教授の加藤尚武氏が「低調な哲学論争の壁を破ろう」と題して、記事を書いていました。

その中に、次の記述がありました。

「この・・・主役は、トマス・クーンのパラダイム相対主義である。その立場は次の言葉に鮮明に出ていると思う。『パラダイムの選択においても、政治革命におけると同様、真偽を決定する上で、関係者の集団的同意より以上の高い基準はない（トマス・クーン『科学革命の構造』）。この言葉を、『科学は本質的に政治的なものだ』と言い換えてもいいだろう」とありました。

現在、あらゆる人間の判断が相対主義に堕しています。理性万能の合理主義を信奉し、そのことで聖なるもの、すなわち宗教を失ってしまった結果です。

そのことは、アメリカ大統領さえ、セクハラ問題では、聖書に誓ってうそを言ったことを見ても明らかです。それも、彼が、敬虔なクリスチャンと言われていますから、なおさらのことです。

また、科学者（学者）が政治的になっていることは、大学の教員のすることをみれば分かります。いま日本の大学では、正しいからとか、善いことであるからとかでは、教員を説得できなくなっています。あらゆる決定が、自分の利益になるか、自分の選好に合うか、といった基準でなされているのです。そうなりますと、学内に盛んに政治的な動きが起こります。教授は言うに及ばず、研究に最も精を出さなければならない若い助手や講師さえもが、そうした運動をするのです。そうして、政治的に「ごまをすり」、その結果「なまけていても」、昇進したり、管理職についたりできるのです。いな、そうする人こそが、大きな顔をして、大学を牛耳り、闊歩しているのです。

こうした相対主義を打開する為に、この論者は、「低調な哲学論争の壁を破り」「新しい普遍思想の構築」を目指そうと言いますが、皆と同様に、その道がどこにあるか提案できていません。

「この問題をさきほどなくなられた中村元先生は終生問い続けておられた。この中村先生の問題意識を引き継がなければならない。」と述べているだけです。

その中村先生ですが、それを目指されていたことは、ご自分が比較思想学会を設立されたことでも分かるのですが、でも、先頃、私が読んだ「日本人の思惟方法」と

いう論文では、西洋的な見方がバックにあり、その視点から日本人を見ていて、そても統合とか普遍思想の構築と言えるものではありませんでした。

多くの人は、人類普遍の思想の構築が必要だとは言いますが、それが、どんなものであるのかを正しく言っている人は、私の知るかぎりいません。

私は、それを釈尊と老子とソクラテスとキリストの四聖の教えに求めています。ご存じの通り、釈尊と老子は東洋人で、ソクラテスとキリストは西洋人です。でも、私から見ますと、東西の区別を超えて、これら四人の教えはみな同じです。

これらの人は、一様に自己への執着を超えた解脱の境地、人格完成の境地に至っています。そして、その境地に基づいて説かれた教えは、絶対なのです。多くの人が賛成するから、そうなのではありません。なかなか理解して頂けないかも知れませんが、それは、例えば生死という時間を超越して永遠な境地に至っているから絶対なのです。相対なものに依存しないで、絶対なものと一体になっているから絶対なのです。ということは、無限の宇宙を自己の内に体感するということでもあるのです。

そうした人の教えを判断基準とする時だけ、人間は相対主義を脱し、過ちを犯さないで生きて行けるのです。

釈尊のことば（九一）

―法句経解説―

第二二章　地獄

（三〇六）いつわりを語る人、あるいは自分がしておきながら「わたしはしませんでした」と言う人、――この両者は死後にはひとしくなる、――来世では行いの下劣な業をもった人々なのであるから。

テキストとしています中村元訳の注釈によりますと、この偈は、『スッタニパータ』（中村元訳『ブッダのことば　スッタニパータ』岩波文庫）の第六六一詩を参照のこと、とあります。その（六六一）は次の通りです。

嘘を言う人は地獄に堕（お）ちる。また、実際にしておきながら「わたしはしませんでした」と言う人もまた同じ。両者ともに行為の卑劣な人々であり、死後にはあの世で同じような運命を受ける（地獄に堕ちる）。

この二つの偈で言わんとしていますのは、多分、どなたでもお分かりだと思います。「不妄語」を「戒」めるものです。

おそらく現代人でも、「嘘をつくこと」が善いことか

悪いことかと問えば、悪いことだ、と正しく答えると思うのです。でも、実際は、この戒律は、ほとんど、現在の日本では守られていません。

誰でもが、自分を守るためには、平然と嘘を言うのが、さまざまな場面で見られます。マスコミを通じて報道されますように、政治でも、経済でも、警察でも、裁判でも、行政でも、教育でも、家庭でも、です。あらゆる場面で不妄語（嘘）が横行しています。最近の実例ですと、先日の前大坂府知事のワイセツ事件の裁判が如実にこのことを物語っています。私の体験でも、学生に不妄語戒について話しをしますと、レポートに「私は、嘘をつかないでいることは殆ど不可能なほど、毎日のように嘘をついている」と反省する学生もいるほどです。また、小中学生は言うに及ばず、幼稚園児でも嘘をつかない子はとても珍しいと思えるほど、子どもたちが日常茶飯事のごとくに、平気で・平然と嘘をついています。

なぜ、現代人は、こうなってしまったのでしょうか。

結論から先に言いますと、現在の、特に日本では、精神の働きを構成する「他己」の働きがとても弱まってしまったからなのです。

それでは、なぜそうなってしまったのでしょうか。

ご存じの通り、日本では明治に廃仏毀釈令で仏教を失い（葬式仏教だけとなる）、大東亜戦争敗戦で、神道と儒教も失って、民主主義だけが、思想らしきものになってしまったからです。それは、「自己」の働きのみを追求する社会になったということを意味しています。

このように、他者性を欠く民主主義では、個人一人ひとりが、自分の「利害得失や選（え、または、よ）り好み」だけを全ての行為基準として行動するようになるのです。聖者の教えも偉人の行いも、自分の利益と選好に役立つときを除いては、判断の基準とはなりません。

この偈にありますように、「あの世」も「地獄」もともに他己の働きをなしていますので、そんなものを信じることは現代人にはできないのです。

ですから、「行いの下劣な業」とか「行為の卑劣な人々」と言われても、ピンときません。自分の「利益と選り好み」にかないさえすれば、下劣であろうが、卑劣であろうが、おかまいなしです。そんな言葉さえが、日本ではもう死後に近くなっているのです。もし、使うとすれば自分を守るために、他者を非難するような時だけなのです。自分は卑劣で下劣であるのにです。

この不妄語戒は、いま日本人が最も取り戻さなければならない戒律です。実はそれが、社会が崩壊していくのをくい止めるためでもあるのです。

後記

一、梅雨になり、うっとうしい天気が続きそうです。近所の田んぼでは、おそ植えの田植えが盛んです。

二、あまり具体的には申し上げたくないのですが、いろいろ残念なことが起こります。いま日本人は、他者のこころには無関心で、自分の考え方が間違っていて、そのために他者の言葉が気に食わないような場合でも、その言葉を発した他者を強く非難します。自分が他者にかける迷惑にはまったく無関心ですが、自分が少しでも、たとえ間違っていても、傷つくようなことがあったり、いやしくも迷惑をかけられたりしますと、怒りに震えます。日本人の被害者意識と権利意識の肥大には目をおおうものがあります。もう日本社会の崩壊も間近なのではないかと、懸念されます。

三、二回お休みいたしました「釈尊のことば」を少しだけ書くことができました。何しろ、随筆として書きたいことが山ほど出てきて、つい、そちらを載せてしまいました。まだまだ、書きたいことがあるのですが、抑えています。

四、このところ、毎日のように草刈りをしています。あちらを刈れば、こちらが伸びます。それに、昨年、開墾するために切り倒したり、切株を掘り起こしたりしたものが、そこらに放置されていたりして、今年はそれらを片づけたりするのが、また大変です。でも、無心で汗を流しています。

五、昨年と同様に、一五〇本のさつま芋の苗を買ってきて、植えました（一八〇〇円）。昨年の芋はまだ、発砲スチロールのリンゴ箱で、腐らずに保存されていて、毎日のように頂いています。次に収穫する十月まではあるのではないかと思います。

六、三月に植えたジャガイモが、間もなく収穫期を迎えます。「てんとう虫だまし」という害虫がついて、やむをえずマラソン乳剤を散布しました。

月刊　こころのとも　第十一巻　六月号　（通巻　一二六号）

平成十二年六月八日
〒７７２―８５０２
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０